新局玉石童子訓

巻九

へ逆18
1279
24

新局玉石童子訓巻之五上冊

東都　曲亭主人口授編次

第三十九回　非常の根抵妙に奇瘡を美を　刑餘の細人送に機會に驚く

却説末朱之介晴賢は枸杞村なる孤屋の門に車を遣留めて只管に呼門ふ程に主人とおぼしき一個の莊客。年齢は五十有餘也。蚊拂團扇をとりに持ながら應と答つゝ出て來つ。朱之介を左見右見て這癩蝦蟇が何なるぞ。曛昏に物々しく人を呼び立るやある。その内欲くは始より乞ひで何等の所用あるやと叱るを朱之介は些も否唱ず。既に見る非人にあらず福富村より觀音寺へ湯治の為に赴く者なれども身に惡瘡ある故に人敢て宿を貸さず。稍這里まで來にけるに前程は都て山路也。單車を遣るべくもあらず。俺腰に些の盤纏あり。願ふは御身俺為に今宵より人を雇ふて明日なほ早

村田

馬琴　梅之雪

1279 24

天ホ車ヒ牽せて。観音寺ヘ送らせあつて。俺然ぞろ報ヒとゝ。這義を振まあらまる。
と請ふと主人いらゆて。開いかさもあらぬるぞ。当村ハ観音寺の御城の普請の夫
役ホ徴れて。壮佼毎ハ一人も居らぬ。偶家ホ在る者ハ。俺ホ劣し老人ゑれ。傭ふべき者
あるヲ。開ハ又外ヒ頼ミねか。と辞ふと。朱之丈ハ。然らば其人ヲの方の来るまで。咱
ら。ヲの地ホ車ヒ留めそ。姑且将息せよ。欲ヒ見れば前面ホ空小屋あり。要ヲハ咱ラホ貸て四
五日起臥ヒ饒ーぬる。其房銭ハ伝ヒまるゑ。と請求ると。主人ハ。ゆゝ沈吟ヒ。那
里ハ咱ラ。稲置小屋ヒ。只今ハ要ヲけれども。出処不定の孤旅客の而も難病あ者ヒ留
るヒハ。ゆゝ固辞ハ朱之丈ハ恨ーけホ其顔熟ゝ。ちち向上て思ひ出さり。珍ーや。和
主ハ是ニ池邨ヲ。宿六便ホあらぬ。と。向れて主人ハ胆ヒ洗ーて。開ヒいふまで知られけん。
抑和郎ハ何人ヲ。と問復られて。然ばヒ。咱ラハ九年前ヒ。ヒ母親ヒ共侶ホ福富
許富居ヲ。未松珠之丈即是ハ。和主必覚あべ。今ハ姓名ヒ改め。未朱之丈晴

賢ヒ喚ー。ゆゝ大和ホあらけホ。福富ホ猶受合ヒ。并帳の餘波ある故ホヒ。
んとて。ホけホ其次の日ヒ。ヲの蒼出来て。身ヒ難ヒ。ホ。和主の宿所ヒ訪ざり
ヒ。然ると。小忠ニヲ貪慾ヲ。遽與ヒ。金子ヒ渡ーハせで。観音寺ヘ。ヒて湯治せよ
とて。車ホ載て追ーたり。腹ハ立ども。身の甲斐ヲ。稍這里まで。ヲ。和主丈何
ヲの故ホ。池邨ホ居らぬ。這頭ホ。転宅ヲ。ヒ。問ハ。宿六嘆ーて。和郎の面
影変ーかば。名告られねば知ヲ。ヒ。現ホ。聲音ホ覚ヒ。原来珠刀称ヒ。
人の落魄ハ知られぬ者ヒ。只痛ーく思ヒ。這里ハ咱ラ。宿所ホあらぬ。合宿留
守ヒ。と喚ー。ゆゝ者夫婦身故ヒ。ホけホ其子盆九郎ハ。夫役ホ徴れて。家ヒ者ヒ
故ホ。只得咱ラ。留守ヲ。ヒ。河加ハ。池の宿所ホ在り。昔馴熟の和郎ヲ。ホ。ホ如
難病ゑれば。空小屋だらハ。貸もせん。観音寺ホ温泉ヲ。薬湯風虎ホ。ヲ
ヒ。然ル難病の愈ーヒ。ホ。噂ヒ。今此ー癒らば。那里ヘ。ヒて。ヲ

醫師に療治をこふこと七よかゝれ其折まぎれ那里にて徐に將息をのゝれと懇切に慰さめ
躰て車を推遣りつ件の空屋へ資入れて菰莚二枚と布儲をとゝ朱之介の臥蓐に
も其後大なる握飯二四箇と煎茶の上瓶執添てのこゝにて夕餉に取らせ朱之介に
且感し且歎びに堪ぎて憤鼻禪に結着する金一分と搒出ゝ是を宿六に贈りて
ゝ聊に伝れども今より後の食料に先受收めのこれとゝと宿六は果ぎいでかい
其義に及ん人並なる和郎の難病療治に多く錢に没へ癒て後に謝物とゝ
受もせん今は要すしくと辭ゝて歩ゝ出ゝ朱之介に一錢を費さぎして三度の飯に僅に安
身の所とゝて八月の時候にて這里に在り約莫その一村に枸杞最多くの地方にて其葉
とゝも又生出て其ゝの家に隨に家毎に是をのゝ生牆に做さるいるく或に田園の畔ゝに
その物多くを其人合て薪に充ども盡ぎれば人吸做して枸杞村とゝ枸杞に素是神
藥にて顔色を増髮髮を黑くし齒を固くし精を壯にも皆是補益の良劑にて脾

胃を調痰血を和げ毒瘡を治し兩濕を拂ふその他の效驗枚挙に遑あらぎれども
その地の愚民皆是を知る者あるとゝなれば徒に藪を做て其ども盡ぎるを患とゝ然れば秋八
九月に至る毎に其實絆に染做て有數に長視るにわれども枝に刺あれば折者多く
況食料に做に當らぎる春毎に其藤葉を摘採て蒸て煎茶に代る者あり其故に
本村の莊客に長壽寺七八十に至る者あり是れども其經驗を知らぎ世に千里の馬なれども
ねど李伯樂にあらぎれば誰秋よく是を知るぎ元そをゝ畋園に番異にのゝ良藥も是に似る
るあり只知らぎるを然とゝ間話題休小程に朱之介に盆九郎の空小屋に單起臥
程に秋も八月の中旬に成て夾衣欲る時候なれども件の小屋の邊ゝ一叢の枸杞
藪あり又左右三面に枸杞の生牆あり此れば長脚蚊いまぎ亡ぎて昼も身に寄るを
拂ふのゝ夜に漸々枕に取く虫の聲より外に友なく衣片布く霜に眞れど折ら十五
夜の月隈なく齊て茂林を洒る鵜の聲を罪なくて配所の月を見まく欲とのゝけん。

昔の歌人の風流を似るべくもあらざりける賢とうく不肖とうく。人静なる時も萬慮
祛えて妄想なり。動くがよりて慾情起る。ゝと知りて做さ支あるへ慾を禁めるざれ
壁言朱之介の如き者も難病既に身に逼りて只其平愈と祈るの外なく思慮を費
さ所あらざ刈又今宵い特に天霽月明にさ寝れず戸得清光の
下に坐さて單更闌るまで在り浩處に最小なる両箇の獣忽然と出て来て朱之介の
身邊に在り。朱之介是を見て田鼠なるべと思ひ拍鳴らして是を逐ふ走りて
枸杞藪の内に入りぬ。姑且く又出て来ゆるを朱之介月を燭に其小獣を覘見るに鼠
にあらざ。形状狗児に肖たりかば深く心に訝りて奇怪の獣なるかな。生拘て人に
賣らば錢に做るとなるべしやと尋思さて傍なる竹笠を取て引きて猶近づくを
俟程に又只件の小獣い敢人を怕るゝとなく又朱之介の膝の邊へ連立て来ぬ
時待儲る朱之介へ准備の竹笠を取て阿呀と叫びて掩へ獣い逃るに暇

なく二頭なら笠に布れて逃を求めて出まくも。當下朱之介思へらく這奴些に傷ぎへ
捉逃さるもあらじ。要こそれと車の推木を撥含ら笠の上より漏さ曲なく突かば両
箇の獣い弱りに寂とさて音なく倒れ
果して奇怪両箇の獣い死て笠の下に在り。生拘まく思ひに突されども笠を隔て
身を傷るに至らざりに脆に奴なる。と呟て出を含て抗て又よく見るに頭より尾に
至て長僅に四五寸に過ぎ。形状い狗児に似れども真の獣にあらざ。正に是木に
根を彫るが如くなるべし。狗状を做せる造化の精妙涯りなく這天工に又驚く栄
之介い呆果て左さ右さ思へども素是何物なるを知らず。其形の奇怪
なるを馥郁と香氣あり咬へ餓を凌ぐるやあらんと思ふを夜の五三の時
候に既に物欲しく做りかば試に其一箇の獣の前脚を嚙見るに木根なれ
ども余れ壊なく味甘くして固かれば敢て放とうく。憶ども其一箇を送る

く喫盡さ〜かば立地ふ飽満ぬそ心地清爽ふ覚ふけり送る一箇の人ふ見せて後々
までの話柄ふ做さなそと思ひ〜かば开ぐ儘飯等笼の内ふ斂めて是とりて枕れあけ
有徒り〜程ふ朱之丞ぐ全身の毒瘡より猛可ふ水膿の流ること雨の樹杪ふ沃ぐ
如く石滴の山より溜るふ似くれい朱之丞い驚いて急ぎ拉をりて是を拭ふ単衣さへ絞る
可ふ身の濡ること一時有餘其暁天ふ水濃の流も止ぎ做り〜かば身も隨て軽く覚て
且睡眠ふ堪ざれば単衣の乾くを俟て赤裸ぬて車蒲団ぐ被て熟睡をりけ。
徒而其次の日ふ宿六ぬ例の如く炊ぎ〜朝飯を喫果て野田辺ぐ去て来ても朱之丞い
いまだ覚ぎ他へ難治の病人なふ倘宿没ぬとまるとあらば反て村の尼僧ぬて俺銭の
没ぬもあべ〜呼覚さばやと思ひ〜握措る朝飯ふ固味噌煎茶と合添て宿屋
のやら鱗ら殺蓆戸推開てやよ珠刀称起ぬ日の高ぎこと三四丈巳牌ふ既ふ過ぎ
やよ起ぬと呼覚せば朱之丞ふ応と答て被ぎ〜蒲団を掻遣り赤裸ぬて起ぎぬ。

こと見れば又怪むべ〜他ぐ全身透間なく抓乱なる毒瘡の一夜の間ふ餘波るく皆
悉愈果て瘡痂ぐふ遺者なく面部總身潔白く全身美〜く做り〜かば宿
六ぬ胆を潰〜て是ぞ什麼とむるふ即今見る所をもて支云云と朱之丞ふ告て其
故を詰れば朱之丞ぬ赤裸ぬて〜みぐ〜ふを見ふ脚を見ふ頭と顔を拭て見て其
瘡痍の果ぬを知る歓びふ堪ざれば既ふ乾き〜単衣を掻合ふ是を被て遽〜く
帯を結びて謝〜て宿六ふ合るぬ小父よ俺瘡の愈るへ箇様々々の事あるとも
昨宵両箇の奇獣を捉ふる首より折ふ物欲くぬ隨ふ其一箇を喫〜かば猛
可ふ瘡より水出て拭ふ暇なく〜ぬ其後睡眠を催〜て今ぬて熟睡をけば尾
ぬて説盡〜て又ぬ件の獣ふ最小さる狗児ふ似て真物ふあらば寔ふ木根の
天然と其形状を做せるぬと疑て虚談ふもせられぬと思ひければ其
一箇を留ぬ〜則這里ふ在り是見ぬと飯等笼を開て件の奇木根を合出て

そ
开ゞ儘指示せゞ宿六ゝゆゑ毎ゞ感嘆の聲を沿絶ぜ件の木根と左見右見て且
歎ひて談ぜる中。此ハ是豫ゆく。拘神と称唄做ゝる。神藥ゞあゝ人ゝらゞ世爲
かゞ良劑るゞ和郎不用意ゞ是を給て毒瘡立堪愈ケハ年来信ぜる神佛の
利益ゞ有べゝ就て一條の話説あり。近曽觀音寺の城下ゞ五足齋延明子
と喚做ゝる。一個の醫師あり。开ハ爲る比俺弟留守七夫婦の大病の折久く療
治ゝ乞ゝかゞ咱爲も粗面善ゝ。ゝ所ゞ那吾足齋ゞ一個の女児あり。其名を晩
稲と喚れて今茲ゝ十六七歳ゝ。傾稀ゝ美女ゝれバ觀音寺の城内ゝ第
一の權臣ゝ。ゝ賀甚甲殿ゞ恋れて既ゞ媒談ありけゞ。無慙や件の小姐ゝ面
瘡猛可ゞ那身ゞ出来て花の顔忽地ゞ四雜刹の如く做ゝ。ゝ一ゝかゞ二親痛く憂歎
して素より家業ゝ。ゝれ和漢の藥種價を惜ま煎藥膏藥ハ勿論ゝ或ゝ煉藥
藥風呂療治ゞ。ゝく術を盡せども竟ゞ效驗ゝ。ゝるけれバ吾足齋嗟嘆ゝく。

俺療治今ゝ盡ゝゞ似ゝれども。猶一箇の奇藥ゝ。拘神を用ゞゝ。ゝれバ即
效ゝ。ゝ。述異記ゞ。人參千歳ゝ時ハ其精化て小児ゞ做ゝ夜出て
藥園ゞ遊ぶゝ。拘杞ゝ亦千年ゝ時ハ其根化て狗児ゞ做ゝ夜出て遊ぶゝ人
參ゞ相同ゞ所云拘神ハ即是ゝ。ゝの載て本草ゝ。然ゝけれども古ゝ和漢共
名醫是ゝ。ゝよく用ひ者極て稀ゝ況今京浪速の藥舗ゞ。ゝ。但
拘杞村ハ昔ゝ。拘杞最ゝ。ゝる地方ゝ。其地の莊客是ゝ。藏措者ゝ。欲
是も亦知ゝ。非如然ゝ者ゝ。ゝ。拘杞の根と空て形狀狗児ゞ似た
ゝ。俺百金ゝ。是ゝ買ん。ゝ如律令ゝ書寫て當村の衆人ゞ就て
ゝ。ゝけれ。然深ゝ毎ゝ各家の四下ゝ。牆ゝ。數ゝ。皆拘杞の根
穿啓て。狗児ゞ似ゝ。ゝ採ゝれども素ゝ。ゝ物ゝ。ゝ。勞て功ゝ
果ハ胡慮ゝ。ゝけり。ゝ七月ゝ。ゝ。然ゝ。ゝ久ゝ話ゞ。ゝ。然ゝ和郎ハ

朱之丞

拘神
牝牡
圖の
奇藥の即效朱之丞が
毒瘡一夜ゑ平愈を
宿六

濡さで。枸神両箇を輒く甕て其一箇をそて身の毒瘡を即效あり。十二分の好造化とゝ〳〵ふ。残る一箇を金百両に賣らゞ冥加に餘りある。一大奇事にあらずや。と自畢春蟻めうて説諭せゞ満面笑る。朱之丈い聴ぎ憶ぎ雀躍しそゝい又奇之妙なるかな。和王氏く媒妁をそ。這奇貨を百両に賣て其金子を受合らゞ俺其折に報せん。徒ゝあらず骨折ゆと憑ゆゞ宿六黙頭て开いろ〳〵ゝ。俺い枸神と携ゝて。吾足大人許赴ゝて見せて機に入るゝゞ其折和郎とおていそ既に身の瘡愈ゝ。我まで欲這里にあるゞ。卒毋屋へ生て留守をゆゝ善いそけゝ。とゝふあるに一刻とも早ゝゞよゝ。とゝふ朱之丈再議に及ず。ゝ居べ。と応ゝ。件の枸神と飯等を容ゝ儘に宿六に遞與して俱に毋屋に造れゞ宿六ゝ持かゝる。握飯と煎茶の土瓶と。地炕の邊に閣て。遽く葛籠より洗晒して粘剛る。單衣と麻の外套を出ゝる又蝕く被更ゝ。帯引結て枸神の考を懐と夾ゆそ。又朱之丈に向ひゝ

哥々握飯に飽ゝらゞ。飯櫃い這里にあり。ゝ又茶を煮てる茶碗にあゆゝく。とゝい。脚半草履引穿て立出る時菅笠を撥合ゝ戴く。観音寺を投て。いそゞけ。小程に朱之丈い早飯を喫るゞ。ゝ宿六のゝるを俟に昨宵いの暁天まゞ。沼睡らざりけれゞ。詞敵もるに宿に單徒然に堪ざれゞ横臥ゝ。ゝ嗜睡くて。日未牌過る比稍覚て起て又晝飯を喫果るゞ。ゝ程に宿六かゝる来にけれゞ。朱之丈い出向ゝ。小父よさゞ熟るけ。那里の首尾は甚麼ぞや。と問へゞ宿六好首尾好首尾开い緩やゝに話ゝ。朝夕い冷やゝれゞ。頃者の秋日和ゆゝ。昼い暑中に異らゞ。八朔の晴衣を絞るゞゝに濡ゝたゝ。ゝの汗を先晒乾ておそ。とゝゝ帯を解捨て單刺子に脱更るゞ。ゝ遽に渋團扇ゝ。果ゞ用茶碗に茶汲合ゝ。一呼吸に飲て开ゞ儘高胡坐却朱之丈に向ゝ。ゝ哥々先聴ゆ。咱ゝ。鄭に観音寺ゝ。五吕足大人許赴ゝて面談を請禀ゝに折ゝ

大人ハ在宿ゆえ。即出て對面あり。緯の来意を問ひてかべ咱も拘神の一義を告く。ふを俺家ハ寓居の旅客朱之仆と喚做す壯佼ゞ不用意ハ為く両箇蕩る。其一箇ゆえハ緯の所以ハ箇様々々と和郎が毒瘡難義の又其拘神一箇を喫て一夜の間ハ毒瘡の餘波もあらぬ愈ふ言詳ハ説示して曩ハ我村中へ寄させ申し告文ハ違ふとて。價百金を賜らば朱之仆ハ賣んとハ。先膏と飯等を巻を開て拘神を指出せば吾足齋ハ少事毎ハ感悦特ハ浅くまを拘神を含抗て左見右見る半晌許舍笑をて額を拍て俺徴るハ是ハ是ハ遮莫世ハ稀る者ゑれば俺も見ることまれるぬ然まば目前這拘神の真偽をハ定めがたし。先俺女児ハ是を用ひて面瘡ハ即効あるならば這價金百両ハ明日必遞與せべし。言相違ゑ照据ハ先やる實を取せんぞと。躰てる親筆を添て。其一通を書寫し。印あて是を渡さまてかぞ。咱ゑる則受合て。明日と契りて退る時。吾足齋又宣ふ。明日と又ども早天より問まるべ藥の效驗いまゞ詳ならざるせば事不便ハそらぬぞ。

末牌の時候より其人と共伴ハ来るならば俺も在宿まて俟べ。

まゆ。吾足大人の奥ゞ面あり。まゞ御目ハ拭られども。その式を戻く知られけ欸びの聲ゞ字をゑ。是好首尾ハ。まゞと説誇りて件のる実を。今出て渡せば朱之仆受取て開ゑ見るハ其書ハ道く。可買取藥種の事。拘神一枚價直金百両也右於即效有之者明十七日。金子無遲滞可渡之候。為後照る実仍如件。享禄三年八月十六日。吾足齋延明印。旅人朱之仆丈保人宿六丈とあり。朱之仆ハ合笑て。是ゞハあれば百両ハ明日未後ハのならぬ受取るハ知れてあり。ハ父よ這前祝ハ酔を盡まて寐て待ん有慈る果報を徒ハ渋茶啜りて居るところ。とらひて先件のる實と。畳と斂めて懐より。金一分を掻摑出て。宿六ハ遞與

あてがはう。小父是とのて好酒二斤と何まれ殺と買のて来よ生魚は這頭ふる。源五郎鄰魚瀬田蜆豆腐ふ初茸もよかるべく銭をる惜みそなろるてよとりべ宿六うち笑ひてまぐ那金子とるふ合らで一分郤舎ハ早かるぎや。俺よれ程ふめまてえ。そでくとりても緒付の巾龍引提て市と投ても出ける。小程ふ朱之仗ハ宿六ぐかの来ると。俟と約莫半晌許下晡ふ做りー時候宿六ら思ひ隨ふ酒と酒菜と買合りて。左右ふ引提てかの来る。罇と龍を階框の頭ふやをら閣れて是を朱之仗ふ見せくふ。朝市ならば自由れども夕市ハ然せる物る。和郎の機ゆる入るまでけれど是でも五緡費ーる。とりて残る銀と銭を合生て還せば朱之仗いふ鱗を推戻ーて。然へどるの銭何ふせん开ら又明日の飲料ふ小父預そ別當せよとりく提籠引よせ見く。噫無慙やる炙鯽五串泥鰌一瓶油のやるる酒一斗豆腐ハれども初茸ふ。是で五百ハ高間の原ふ留まるふ八十萬の神ハ御酒を献せどとも夾殽の瓶代ふ。蟹味噌揚て汁ふ其。小父先窓を焼ぜやと我ら口ふ使る。客と主と二人ハ抓料理の両三種迭ふ骨を折暦ふの茶碗酒ハ間没らぎ。夙くも罇を盡ーける。現ふ張樊ら當喫ふ物見の松と杉著を列て養齒ふ使ふ強飲敵ふ癖れば已ら隨ふ戯言を諄返ーる自負傲慢竟ハ俱ふ醉臥て日の暮るも知らざるら。恁而其次の日ふ朱之仗ハ日屬腹ふ塗れる單衣を洗るどして乾くを候く是を着て市ふ出く浴ふ。髪を結せくかの来れハ秋の日最大短くて既ふ未牌の時候ふ做りけり。時分ハよけんと宿六をハそぐつうち連立て五吾足齋許赴くふ宿六ら異詭ふ及ハぎ。今日事成らば百両の十分一ハ俺物ふいらぐ障るるあらで金子受合せくー一本銭の福分さをえと肚裏ふ思ハば俱ふ歩も找ふそ。蚤蝨く觀音寺へ歩ふければ朱之仗ハ开ら儘ふ那宿所の門ふ立せて。宿六先裏面ふ入りて。聲高やふ呼門ふ

程ふ奥の方そ上心と答て五呂足齋先て来ち宿六を見て笑へけふそを早ろ云よと
折々先這方へと請登されば宿六も唯々とだろふ躰く玄関ふうち升りく五呂足齋
と面談を當下朱之丞ハ那聲とうち聚て是必屋主人五呂足齋ろらと猜し。
外面ら窺覗るふ物色安定ろうねども年齢ハ正ふ是四十有餘ぞ總髪之身ゆ
仁田山紬と縹紬ふ染做ろる單衣を被て聖柄ろる短刀を佩さる。當下宿六ら吾
足齋ふうち向ひて昨日見せまあらせさる枸神ハ即效ひし狩御約束でハ活主と相
俱ーそ伺ひろひ之とふを五呂足齋ら果ぞ然れべとよ其ゆえ昨日和主ゞ少ろと躰て
咱ら枸神を製劑ぞ拙女晩稲ふ服用さ母ふ味最宜ーと時を移さぞ其一
劑を堂畫ーたりれば心地清爽ふ做りぬとハろ。徒而其曛昏より晩稲ゞ面
瘡の腫増て薄膿の流ると涌成ぞ泉ふ異ろぞ。さてそ拭ふ湿もろく約莫
一時許ゆて膿竭て地腫減ゞ病人ハ快ふ躰て睡ふ就ーゞ敢又驚さぞ。

母ハ枕方ふ是を護りて其覚ると俟程ふ今朝ぞも已の時候ふ至りて覚て
起出ると見れば晩稲ゞ面瘡痊り果て瘡痂ぶも殘る者ろく其容止ハ病
ざる時ふ倍て美ーく做りーろ。那身ハ病ら之俺们夫婦ゞ歎び何支ろ是ふ勝
べ。然れば晩稲ふ浴さぞ髪結化粧ふ時移りそ今身装ぞ果ーぞ有徒
き。那嫌談ふ憚りろく俺情願ぞ果さろ誠ふ枸神の即效ふ由れり。然れば
約束ふ違ふ多ろく那代金ぞ遞與さべ。活主朱之丞とやらンゆも咱ら目今對
面せ。這意を伝へて伴ひのくとふふ宿六再説ふ及ばぞ歎び美て答ろ。升ら
又愛之涯りふ活主小姐様の面瘡御平愈と朱之丞ゞ毒瘡の平愈と其
多相似ろ。現ふ神藥の效驗ハ爭ひゞ者ふこそハ金子ぞ他ふ賜りねま實ぞ
返ーまらもべれ。とりて躰て身ぞ起ーそ走出て朱之丞ふ件の首尾ぞ咱ら恐べ
朱之丞ハ天ふ歓び地ふ喜びて點頭のぞ。餘談ふ暇ろ折ろれ引れて玄関ふ登り

来つ。宿六も云云と。軌合されば吾足齋は是へく。と招くを。朱之丞は阿とぞ
ア。ふ膝行頓首。初見参の礼を做さるを大くさらぬ。僅ふ頭を抬げ。ら。昨日は
宿六の媒妁。そ。御用ふ達し。奇藥の即效仰示させぬ。ひ。御歓びを査し。
つ。ぬ。ぐ。ぐ。価の百金を目今遞與しぬ。れ。し。と。ふを吾足齋うち。て。開ら勿
論のなえか。百粥盡さる俺女児晩稲ど面瘡の一夜の間ふ愈て痕ぐふあ。で。做
ち。は正ふ和殿の賜へ和殿は大和の人と。狹ぢ。ぬ料らざるける對面。そ。先近く找こぬ
へ。然だろ。丈意さるとろはとのうまて朱之丞は辭ふ。う。く。ま。ら。ば。饒さ。ぬ。ひ。孫と
応ぐ膝を找ぬ。頭を抬げて吾足齋うち。向ふ時創て知る。心の驚ぐ大抵ぐ。
ぎ。憶ぎも聲を被て。御身は是辛踏氏。光四郎。主ふあらぎやとられて驚く吾足
齋は瞎を定め。佶と見て思ひ。げ。る。や。現ふ和郎は。珠之丞。ぞ。あ。り。け。る。よ。ぬ。ぎ。の。程ふ。大
人備く。童顔の耗。れ。ば。見。と。れ。と。ぞ。鈍。け。れ。汝の母は奥ふ在り。戻く。逢。て。歓

び。せ。ぎ。と。の。ひ。く。聲を。あ。り。立て。や。よ。光。芋。其。里。ゆ。ぞ。居る。珠之丞。ぐ。ま。ら。ぞ。よ。ぬ。で。對面
ま。の。ぬ。ぎ。や。と。両。五。番。呼。れ。ば。阿。夏。は。面。夏。欲。と。ど。ら。ふ。慌。惑。て。ぬ。く。来。て。朱之丞。を
見。つ。宿。六。を。見。つ。て。び。胆。を。洪。し。て。現。ふ。珠之丞。で。あ。り。け。る。と。思。ふ。倍。て。大。き。う。做。
主。の。見。と。れ。の。ひ。も。故。ま。た。ふ。あ。ら。ぎ。か。し。宿。六。主。さ。と。連。立。く。訪。来。ま。ま。し。は。不。思。議。の
再會。誰。ふ。ぬ。て。珠之丞。を。ま。て。来。て。逢。し。ぬ。ひ。る。御。情。こ。そ。嬉。し。け。れ。と。謝。ま。れ。ば
又宿六。も。呆。ろ。く。と。半。晌。許。頭。を。搔。く。谷。る。や。う。否。小。可。は。這。御。宿。所。と。然。る。方
ざ。ま。と。思。ひ。も。か。け。ぎ。昨。日。拘。神。の。ま。ふ。就。て。推。参。ま。ま。り。し。折。故。弟。留。守。七。の。噂。の
外。ふ。餘。談。る。く。今。日。珠。刀。称。を。ま。て。来。る。の。と。人。ゆ。ぬ。く。と。ひ。ま。ぎ。と。ば。五。足。齋。黙。頭。て。
然。と。和。主。の。ま。ひ。ま。も。阿。夏。ふ。ぬ。ま。る。よ。し。あ。れ。ど。も。今。い。忘。れ。て。思。ひ。も。必。ぎ。名。を。宿。六。と。告。れ
て。も。其。人。と。い。知。ら。ぎ。ら。ば。況。大。和。の。旅。客。る。拘。神。の。活。主。朱之丞。と。ふ。名。は。昨。日。ら。
ぬ。ま。れ。ど。も。實。は。俺。乾。児。る。珠之丞。ゆ。て。あ。り。け。る。と。神。る。し。ぎ。て。誰。狹。悟。ら。ん。開。其。

談ふあらぢや。とのたいて呵々とうち笑へば朱之介は母親阿夏と吾足齋うち向ひて。
別さうもうは九稔猶陸奥ふ在まるべらんと思ひ者と思ひ出や幾の比ふ秋這郷
へ移り来りて今料らぢも再會の本意を遂んと世ふ稀るべき幸るべく大人の姓
名俺名さへ今へ昔ふ同じからねば迷ふ知らぢ知るよりもるべく酷く無礼を仕りぬと倍
詰び阿夏は恥る色あり朱之介はうち向て名を改めい主と汝と又只二人のみな
らぢ。俺身も亦故あり近曽這里へ来る時より名を更めて老芋の刀自と喚做
されぬ。その餘會話は亟ふ盡もべくもあらぢ。宿六叟も共侶ふ卒這方へ請
找むれば。吾足齋も俱ふあうヨくもあらぬ若黨奴隷ハ前日猛可ふ故あり身の
暇を取らせ。ら折ら無僕の伯ふまそ。然せる欵待ハ汝らぢとも心ばらへ酒不要。
薦めて飲びと盡さらんや。卒先奥へと右ひぐりよる。誘ひ立て已れば宿六を困ぐる。
應をまう朱之介を立せて俱ふ奥ふ入る儲の席ハ六疊可を布成る小室ぢ。檐

廊あり莎庭あり。朱之介と宿六を相隻びぐ。客坐ふ就ぬ元四郎の吾足齋と打
譚ふてあり。時程遠らぬ酒肆の小厮ぐ所用を使ふ来りれば阿夏の老芋ハ悄
ぜふ酒殽を吩咐ひ。ぐ立て遣まう女児晩稲ふ茶を著ぐ。ぢて親是を宿六
と朱之介ふ薦めども姑且まそ酒肆の小厮ぐ酒一樽と酒菜幾種欵引提の汝
桶ふ容るを。甘ハ口よりのそ来ふければ花芋ハ是を受含て。銭を還して小厮をかへ
つ晩稲ふ酒を温まさせて或ハ碗或ハ碟子ふ酒菜を装分るどまう。酒盃銚子と共
侶ふ次ハ弟ふ客坐席ふ安排て晩稲ふ酌を執る時。朱之介ぬふ告てのまう。さる
俺家の頃蛉女児ぢそ名を晩稲と喚做ぐ。陸奥ふ在り時主吾足齋の親族の
孤ぢそ。便着るべ者ぢ。ば年七許ぬる時より養ひ取て今へ年来ふ做ぐ。珠之介と
美女弟ハ宿六叟も相識ふ做ぬ。と正首ふ女児自慢の親心執合られば朱之介と
宿六も応をまう。俱ふ目を挙て晩稲を見るふ面瘡病ぬる少女ふ似ぢ世ふ稀るべ

美人也。沈魚落鴈閉月羞花。とやらんか。玉顔雪膚鄙に老鄙をば。
眉連れる蝦夷遠らの陸奥の盡処ふーも這固小町もあり けりと思へば俱ふ羞慚を。
初對面の口状も果敢々々しくのいざりけり。偖而五足齋ハ宿六名ふ揖讓して盃を創
るふ主も客も強飲家なれば献酬の間ふ長談多辯餘念なく。俱ふ笑局ふ入りけり。
當下老苧ハ朱之丈ふうち向ひて珠よ汝ハ這年來孰地ふ秋身を寓ふ。俺身陸奥ふ
在りし時京師の便ふ言傳て鴈の翅ふ書の數両三番ふ及ぶまで西殿とて訪せーふ。
往方知れ老。とのを吟えて術も歎ふの杜ふらで神ふ佛ふ願言の今日届ぬーて娘ーけれ
是ふ就ても痛ましハ福富翁のみ元俺身まの地ふ旅宿の比人の噂ふ多知りける。
那家の禍鬼ハ又ハ何ものもあらぎか。宿六叟ハ何ものの故ふ三池邨ふ在らぎーと。何ぞ枸
杞村ふ移りゆひる裕と云怡と云情由を少ねばあろ弱ぎろ。具ふ告よ甚麻ぞ也と
問れて朱之丈ハ嗟嘆ふ堪ぎ受てるふあるを盃の酒を一口ふ飲乾て主ふ返して答ふ。

奴々の疑寔ふ所以あり。俺身御身ふ別ー後日野西殿（兼顕卿）の紹介ふ香西元
盛主ふ扈従あり。罷遇時と云るあふ元盛主ハ人の為ふ説訴せられ敵られ
其折俺身ハ辛くまて海と渉ーり播磨路と備前國の封疆る三石の城ふ届り
去時料らぎも叔父奥房主ふ環會ける秋びあり。是時より俺乳名の珠之丈と改ぎ
末朱之丈晴賢と唤做る。ふも亦小父ハ公の教ふよれ。然れども那里ふ留ゆ居則
小父ハ公の指揮ふて武藏の河踰ふ赴ぎて扇谷朝奥主ふ仕ーより愛顧老黨ふ弥
増て出頭せぎと云ふるるく大和へ使を奉ぎる。沙金白布と多く齎ーて遥ふ那地ふ届
ぎ時山賊の為ふ薛ぎせられて那御物と喪ひ。かが進退其里ふ谷りてせん術の尽き折
から俺亡父の前妻と吟えをる落垂水の刀自の姪入げる斧柄少女の大尼難と咱ぎ料
らぎ救ひる。恩義ふよりて女壻ふせられて三稔以来那家ふ在り單生活ふ骨を折ぎよ
く丘母ふ仕ーふ斧柄ハ曩ふ難産ふて身故ーより丘母の心始の如くるぎ。折ふ觸

圓明ノ顔色甚タ愚カ如シ

離合時あり
小人僥倖を
得たり

きんゆい

あいそ

あつ一ノ衣裳甚だ朱ルし

朱そめ

あさね

宿六

て、燻さるゝ。最難面ければ、辭し去りぬ。径に浪速に赴きて、十二屋てふ客店に逗留あゝて在りし時、人の為に誣られて、思ひがけなく浪速なる陣館へ召捕られて、久く獄舍に繫がれしが、こも亦寃罪の罪なれば、竟に俺身の尼解けて、世間廣く做しかど、盛運なれば福富る。阿鍵に錢を借んと思ひて、單那里へ赴けば、其次の日より身に瘡出来て、打臥て在りけるに、小忠二が殘忍なる、錢を貸さで罵るに、果は俺身を車に載て、遂に去れて、端なく理に勝ぐる威勢に克ちきれば、辛くも、拘杞村まで來ける程に、宿六婆に環會て、尼會に做しとの、拘神の即効、悪瘡平愈の俺身安らのこゝろ、創て逢見る芙女弟晩稲が面瘡瘡り果て、思ひ付なく親達に、今日再會へ豫の情願に易からぐる幸なるかなと、口に信まる巧言に、辯現に、小人の癖られば、舌の剣に、莫邪に、思わぬ人と恩とせば、是を誣るに、然と以て、悪事を秘して、身の非を飾る。其誰佯も時に取て、實事なるぎと、听者なければ、吾足齋晩稲に、感激して、嗟嘆に堪ぬ、中に、阿夏の老芋に、涙唾て、朱之伏に向ひて、なほ思に増る、汝の艱難、三石とやらンに、小父公に、環會けると、今少しも、欺ぐに、思ふのみ、又後遂に、何とて、果敢く別ぬ、それぞれ、大和に、木偶の如く、主の前妻の女塔に、做しなる、其家の女児の危難を、救ひ、恩義に、二ぢび結れぬ、舊に、縁しの故、れば、開き、切そものなるぐ、家の女児の身故りしとて、汝に、惨刻中さけん、落葉の老婦の腹黒さよ、舊恩と思へば、憐あかるゝ、姑母の、機嫌を、然しも、取難て、辯し去りぬ、浪速に、寃罪の、罪の、繩縛かる、憂身に、枉津神の、夙くも、解け、夏の霜、月さえ、雨の、漏宿と、頼に、堪ぬ、福富に、辛くも、尋ぬ、けれに、那家、今に、衰て、昔の如く、なるぎとも、小忠二が、慳貪なる、舊、孰児と、思ひせで、主人、貞、ぎ、知らぬ、恩を、知らぬ、我も、知らぬ、現に、塵の世に、塵塚に、在しし、人に、人らしく、人の、なるぎと、然れ、開き、左まれ、右もまれ、今日より、大人の、資助に、發跡るまで、茲に、居て、時を、俟こそ、なれと、詞雄々しく、諭ものと、只已ぐ子の、虚言と、実誠と、暴て

泉勝るを耳を貴む婦女子の愚癡と宿六ら慰難て喃阿夏様斗ハ理ふ
結るかゝ咱等も今ハ福富へ疎けれ小忠二吏の心術とくも知らゐど大夫次大人の
あくを做て憑ゝから及るもあるべ。其頭ゆ同ゝから及咱ちゞ拘杞村ふ来て居るハ一向
留守居るを弟の孫兒の後見まれゝ阿加々ハ三池の宿ふ在り折ふ鰐てハ御身の噂を
とゝ出る日もまるゝ一ふ今日の團坐を守知らべ然そ羨ちく思ひ結らハ單咱ちゞ兼
ぬハ侄金九郎のゝハ銭ゞふれば酒を喫ども親の藥禮と今ふ果さゞ大人ふ御無沙汰
仕りぬと陪話るを五足齋推禁ぬゝ其義ふ及ん俺始より珠之介ふ俺素
生を告ぐゝ其比他ハ童年ゆゝかゝるを思べゝ今ハ昔と同ゝから及他ふ為ゝ説
示さゞハ疑ひ氷解まべゝゝ宿六便ハ老芋の舊識俱ふ听ともけちハあらゞゝ
とゝゝも又酒盃を遣替ゝて説ゞを一條の文言けれゝ盡ゝがゝら開ら又下回ふそ。

新局玉石童子訓巻之五上冊終

村田

順補九

童訓玉石童子訓

○第一顔のいろ黄なみむくとも足ゝ歩べ是ふ原ふ
息ざまゝくあるみゝくゝ胃ゝゝたゞゝきあるおよ
○めゞと紅ゞふ色うゆくく寝るゝと我とのむゝよ
○肩なゝゝ背まゝゝ爪ゝゝ足だるゝゝよ
○懲泉血のめゞりあゝ爪ゝくれゝゝそるよう
○ゝゝゝ胃つゝえむゝ痛を腹ふゆゝまゝゝよ
○積さゝゝあみ氣とゝくむ絲やけゝゝゝよう
○月水ゝ遅ゝあゝ感ハセ五ゝ月又ハ三年も絶ゝ水来ゝよ
○常にハ便ゝけゝゝ目まゝ立ゝゝ
○さゝゝゝくゝゝゝ労症のゝくゝゝ煩ふふゝ
○男女小児ふゆゞゝ物ゝゝ色あゝくゝゝとなく紅
此ゝゝゝ月ゝくゝゝ何病ゝゝゝ金使ゝゝゝ

小半刑入百二十四銅

○凡病ひを患ふるに先此能書目をよくよく我病ひよ[illegible]
[illegible]古今稀代の良薬[illegible]
三年九年と種々[illegible]
[illegible]
薬用ひざる病ひやまひいよ〳〵深入り[illegible]
方に絶くひ絶まる食をもみの用ひ全快[illegible]
○[illegible]の病根心氣はれ脾胃[illegible]
治しめ[illegible]
用ゆるに[illegible]
[illegible]全快[illegible]
をもりそげ血の免ぐるを[illegible]

本家　両國横山町二丁目　大阪屋半藏

京都賣弘所　蜻藥師通東洞院東入町大和屋彦右衛門

所府内[illegible]
乃本家[illegible]

清香
奇藥　梅の雫
一包七十二孔

○第一酒の毒消ふ[illegible]

はれ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

初の絹入
[illegible]の業
化粧水　花橘
六十四銅

古今[illegible]
[illegible]
賣弘所　江戸大傳馬町二丁目中程　丁子屋平兵衛